

平成30年11月15日

昨年の手づくり魚道でサケが遡上・産卵！

～魚道を設置した頭首工の上流で54か所の産卵床を確認～

函館開発建設部では、後志利別川での豊かな魚類の生息環境の創出、また、このような河川空間を地域振興につなげていく試みとして、後志利別川「エコ・UPプロジェクト」(※)の取組を行っています。

このたび、平成29年10月に実施した住民参加による手づくり魚道を設置後、これまでまれにしか確認されていなかったサケの遡上と産卵床が多数確認されるなど、魚類等の遡上環境について向上が見られたので、お知らせします。

平成29年10月に後志利別川 住吉頭首工において、地元有志の方々と手づくり魚道の設置を行いました。(別紙1)

今年9月～10月に産卵床調査を行った結果、住吉頭首工の上流(美利河ダムの下流)において、これまでまれにしか確認されなかったサケが群れをなして遡上する姿や、合計54床の産卵床が確認されました。(別紙2)

後志利別川「エコ・UPプロジェクト」で魚道整備の現地指導や魚類の生態、川づくりの講演をしていただいている一般社団法人 流域生態系研究所の妹尾優二所長から、「今後、さらに産卵床の増加が期待できる。」、また、「本魚道は、サケ・マス・アユ・カワヤツメなど後志利別川に生息する魚類の移動は十分に発揮されるものとする。」「との評価をいただいています。(別紙3)

※「後志利別川「エコ・UPプロジェクト」」とは、今金川の会やボランティアの方々、函館開発建設部今金河川事務所が主催し、サケ・サクラマス・アユ・ヤツメウナギ等が生息している後志利別川にさらなる良好な生息環境をつくるとともに、観光客等の人たちが「豊かな時間」を過ごし、地域振興にもつなげていこうとする取組です。

【問合せ先】 国土交通省 北海道開発局 函館開発建設部

今金河川事務所 所長 あきやま 秋山 泰祐 (電話番号 0137-82-0041)

工務課 流域計画官 みさかわ 三佐川 剛昌 (電話番号 0138-42-7604)

函館開発建設部ホームページ <http://www.hkd.mlit.go.jp/hk/>



第1回 後志利別川「エコ・UPプロジェクト」実施概要

函館開発建設部 今金河川事務所

★後志利別川「エコ・UPプロジェクト」とは？

後志利別川では、サクラマス・サケ・アユ等の魚類が確認されています。今後、流域全体で老朽化した魚道の改善等を行い、さらなる魚類等の生息環境の拡大を図ります。さらに、釣り人や観光客等が「豊かな時間」を過ごすことができる河川空間を提供し、地域振興の一助にすることを活動の目的としています。

第1部

【開催日・時間】平成29年10月12日（木）13:30～16:00

【場所】住吉頭首工（今金町住吉 住吉橋上流）

【内容】住民参加による手づくり魚道の設置

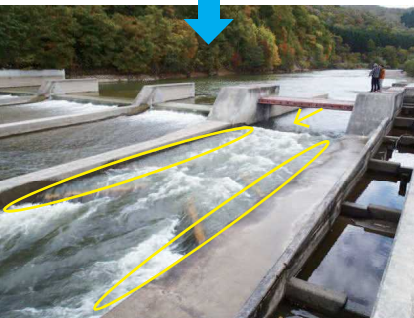
手づくり魚道は、“今金川の会”と地元有志、並びに函館開発建設部の河川・農業事務所職員と協働で、手づくり魚道の設置を行いました。

住吉頭首工の土砂吐きは、平常時は水深が浅く、増水時は流速が速いため、魚類が遡上しにくい状況でした。そのため、丸太を設置することで、水深を確保し、側壁部に流速の遅い魚類が遡上し易い環境を創出しました。

実施前



実施後



丸太によって、側壁部に遡上し易い流速が遅い環境をつくりました。

第2部

【開催日・時間】平成29年10月13日（金）9:00～10:30

【場所】今金町民センター2階 大会議室

【内容】講演会「魚の住みやすい川づくり」

妹尾 優二氏（一般社団法人 流域生態研究所 所長）

第2部の講演会では、流域生態研究所の妹尾優二所長による「魚の住みやすい川づくり」をテーマに講演会を開催しました。

講演では、河床低下等の課題や多自然川づくりの道内事例を紹介して頂き、本来の川の流れを活かした川づくりの重要性について、示唆に富んだ貴重な説明をして頂きました。

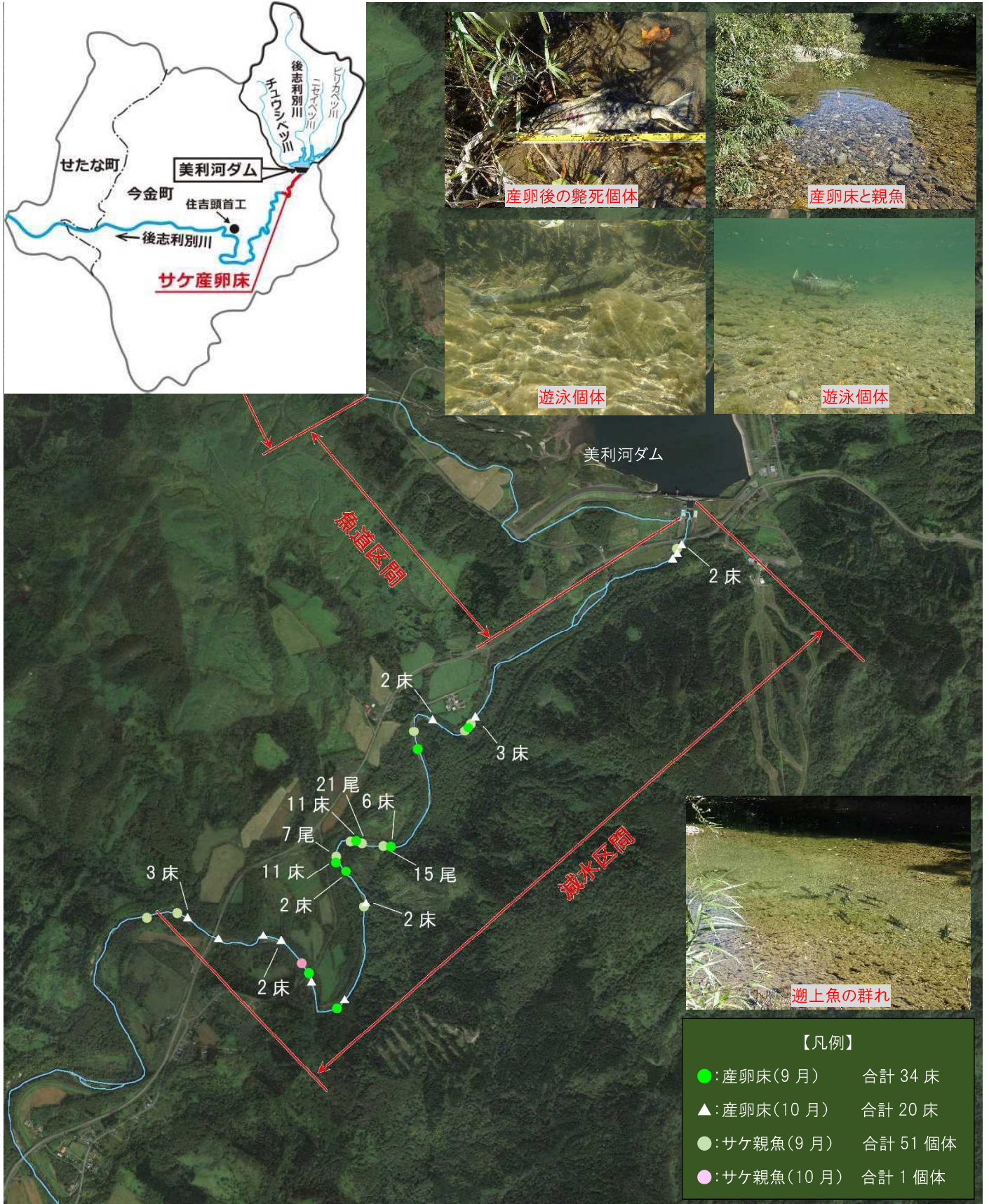


今後も後志利別川「エコ・UPプロジェクト」は続きます。



平成 30 年 9～10 月 サケ確認状況（美利河ダム河川環境調査）

美利河ダムの魚道整備後のダム上下流域におけるサクラマス産卵床の経年的な分布状況の変化を追跡することを目的として、9～10月に2回の産卵床確認調査を実施した際、これまでまれにしか確認されなかったサケの遡上が減水区間全域にわたって確認されました。



後志利別川住吉頭首工の魚道改良と魚類遡上

一般社団法人流域生態研究所

妹尾優二

1. 改良目的

住吉頭首工には写真-1 に示すように頭首工左岸側に階段式の魚道が設置されているが、農耕期には取水ゲートが上がり魚道内に通水流量はあるがサケの遡上する9月以降はゲートが下がり魚道内への通水流量はなくなり遡上困難な状況となっている。

頭首工における河川流量の殆どは土砂吐側を流れ水深は浅く、流速は早いため魚類の遡上は困難な状況にあることから水深確保を目的とした土砂吐部の水叩底盤の改良を行った。



写真-1 住吉頭首工の現状

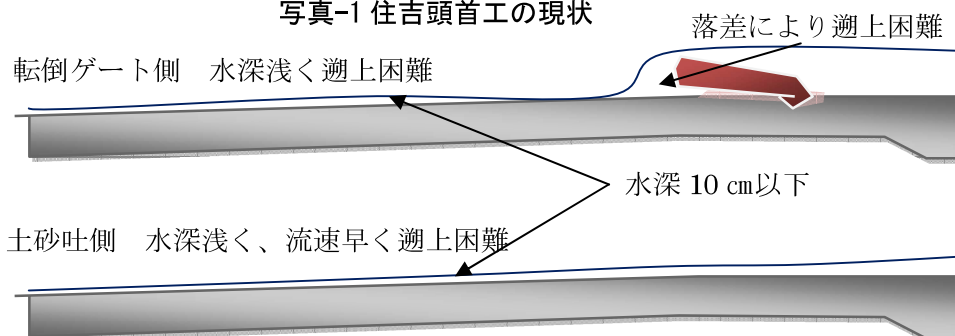


図-1 洪水叩・土砂叩の流況現状



2. 後志利別川住吉頭首工土砂吐改良と魚類移動評価

サケ遡上期の 9 月以降は、左岸側に設置された魚道内への通水量がなく魚道の利用は困難となり、洪水叩や土砂叩側を遡上するが、当該施設の場合には図・1 に示すように双方ともに水深が浅くサケなどの大型魚種の遡上は困難である。洪水時には多少水深確保も望めるが高流速となり魚類の遡上限界流速を越え遡上不可能な状況にある。

このようなことから、非農耕期に常時流水がある土砂叩側の改良を行い、遡上してきたサケなどを遡上可能な水深・流速環境とするため写真・2 に示すように工夫した。



写真-2 丸太の配置と水深流速環境の改善

丸太はφ200mmを2段組、上流に向けてハの字型に設置することで流れは中心部に集中するようになり、丸太周辺での流速環境の多様化と水深確保(30cm~40cm)がなされ魚類の移動環境は整備されたものと考えられる。

2018年度におけるサケの産卵調査結果でも頭首工上流域において数多く確認され(50箇所以上)今後さらに産卵床の増加が期待できる。

本魚道は、頭首工における魚類遡上の欠点を補うために市民・団体等と協力しながら実施したものであるが、サケ・マス・アユ・カワヤツメなど後志利別川に生息する魚類の移動は十分に発揮されるものとする。